

---

# 葬式のあと

時雨沢 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葬式のあと

### 【作者名】

NZコード

N7214M

時雨沢 翔

### 【あらすじ】

親父の葬式を行つた、息子である康幸の一日。

空には雲が立ち込め、街中の空気は重たく渦巻いていた。行きかう人や車もその重みに耐えかね、夢遊病患者のようにふらふらとさまよっている。モノトーンの建物が現れるそばから遠くへ流れていき、重たい遠景に同化してゆく。俺はその様子を窓からぼんやりと眺めていた。俺の乗る車の前には、塗りの靈柩車が一台、淡々と火葬場に向かっていた。

俺は昔を思い出していた。腹水がたまつた親父が倒れたのは、俺が大学に入つて間もない頃だった。B型肝炎ウイルスによる肝硬変だつた。いつ死んでおかしくないとまで言われた親父だったが、薬がよく効いたのか、入院して一ヶ月ほどで帰ってきた。退院直後には、アンモニアが頭に回つておかしくなることもあった。最初はものの名前が言えなくなつたり、体がきついと言つたりするだけだったので、誰も気にしていなかつた。しかし症状が悪化すると、親父はべたつくような汗を体中に浮かべ、ものも言えずに意味不明な行動をとつた。トイレの場所を間違えたり、玄関で寝転んだり……。と思つたら、丸一日間くらい寝込んでしまう。深い眠りから覚めた親父は、何ごともなかつたかのようになつていて、狂つたときの記憶は失われていた。親父が何度もかに倒れたとき、俺と母は救急車を呼んだ。結局、親父は再入院することになった。

親父の病気のことを何も知らなかつた俺は、親父が狂うたび頭に死がよぎつておろおろしていたが、そんな俺を叱咤したのは母だつた。母は気丈だった。毎日懸命に、俺と親父を支えた。親父は何度かの入退院を繰り返し、どうにかよくもなく悪くもなく、自宅で暮らせるほどに病状が安定してきた。しかし、親父の体は労働に耐えられないほどまでに衰弱していた。親父は仕事をやめざるを得ず、母が家計を支えることになつた。そんな母を少しでも助けようと、俺もアルバイトに励んだ。

そして、長い長い四年が過ぎ、俺はようやく仕事についた。その矢先だった。

親父は朝早くに、口から大量の血を吐いて倒れた。救急車を呼んだが手遅れだつた。親父は肝臓を悪くした結果、みぞおちのあたりに動脈瘤ができていた。その破裂が直接の死因だつたそうだ。

母からの悲報を会社で聞いたとき、まさかと思った。その思いは上司に休みを申し入れるときも、新幹線に乗っている間も、親戚だけで通夜を済ました後も残つていたが、さつき親父の棺を靈柩車に運びこむ段になつて、ようやく親父の死を心の底から実感した。棺は俺が思った以上に軽かつた。

靈柩車の助手席には、目を赤く腫らした母が座つている。俺はそんな想像をめぐらしながら、前に視線を移した。

家では葬式で僧侶を呼ばないから、俺は親戚の人たちと一緒に車に乗つっていた。後部座席に俺の母方のいとこの兄と姉が一人ずつ、運転は母の妹であるおばがしていた。今回の葬式には、親父方の親戚は誰一人いない。何かしらの理由で付き合いをまったくしていないらしい。といつても、母方の親戚とも大して付き合いはなかつたのだけれど。

車で一時間ほど揺られたころ、俺たちは前にいるはずの靈柩車を見失つっていた。俺はなおも外の景色を眺めたままだが、車内はざわつき始めた。おばは火葬場の場所を知つていたらしいが、なぜか見当たらないと苦い表情を浮かべた。おばは携帯をとりだし、後部座席の姉に手渡した。

「もしもし」

どうやら母に連絡を取つてゐるらしかつた。

「……わかった。それじゃ、また」

電話を切つた姉は後部座席の真ん中に体を移動させ、前方を見ながらおばに指示をした。

「ガソリンスタンドの四つ角の先にコンビニがあつて、その向かい側に入り口があるんですつて」

おばは言われたとおりに車を走らせたが、どうも見つからないようだ。車は同じ場所をぐるぐると回った。それでも見つからない。そもそもコンビニなんていくらでもあるから、目印には何の役にも立たない。せめてコンビニにねべらに言えばいいのに。けれど、そういう妙な部分が抜けているところを母らしいな、とも思つ。

「おい、いい加減に見つからないのかよ」

後ろから兄の声がした。トラック乗りの兄は、茶色に染めた髪を逆立て、目はぎらぎらと光っていた。声には凄みがあった。

「お兄ちゃん、そんなに大きな声ださないでよ！」

姉が後ろを向いてたしなめる姿がバツクミラー越しに見えた。透き通る首筋に青い血管が浮いている。何の予備動作もなく前を向き直つた姉と目が合つて、俺は思わず視線をそらした。なんとなく恥ずかしかつた。おばはなおも前方に集中している。

俺の前には何度目かの光景があつた。俺は左右の景色を観察した。人の往来はほんとなく、車が道を埋めている。先ほどと同じように重い空気が垂れ込めていて、排気ガスがそれを静かに揺らしていた。この風景に飽き飽きしてきた俺は、火葬場を探し始めた。

ガソリンスタンドの四つ角を曲がって、再び道をまっすぐ進む。少し進んだところで、街中とは違う空気をまとつた場所が俺の目に留まつた。反対車線の一角が緑で覆われていて、それが俺の目を引いた。コンクリート製の灰色の門が大きく口を開いていて、そこから緑の中に坂道が一本通つていた。坂道は大きく右にうねつて、先が見えない。俺は門の上に張り付いた黒い大理石に目を留めた。そこには真つ白な文字が刻まれていた。俺はそこに人差し指を向けた。

「あれ……あれじゃないんですか？」

みんなの視線が俺の指し示す先に向けられた。

「おお！ あれあれだ！」

最初に気づいたのは兄だった。次に姉も気づき、俺と同じように入り口を指さした。

「どこどこ？ 私にやわからぬよ

「あつちです。あの向こうへ

「お母さん、あそこよ！……ああ、通り過ぎちゃった」

俺たちはもう一周したところで、ようやく入り口に入ることができた。

大きい火葬場だ。建物はガラスと白い壁面で構成されている。おばは先についたもう一台の親戚の車を見つけると、その隣に車を止めた。おばは携帯で連絡をとった。

「次が来てたから、もう棺を納めて、火葬してるので。早く行きましょう」

納棺に間に合わなかつたのか……。

自動ドアをくぐると、中は冷房が効いてひんやりとしていた。床は白く覆われ、同じように白い天井を、表面を磨かれた黒い柱が支えていた。間接照明とモノクロの室内はどこまでも無機質だ。入り口からまっすぐに通路が続き、奥の階段には外光が重くのしかかっていた。その途中、左右にいくつもの通路が垂直に枝分かれしていた。階段から、黒一色の団体が神妙な顔つきでこちらに降りてきた。彼らは僕らとすれ違う前に右の通路のひとつに吸い込まれていった。正面にあるガラス製の階段を上り、母と親戚たちに合流した。母は葬式の時と同様、暗い顔をしてソファーアに腰掛けている。おばが母に駆け寄つて、隣に腰を下ろした。一人が並ぶと、やはり姉妹なのだと俺は実感した。

二階には想像以上の人気がいた。若い子供連れの夫婦、ハンカチで顔を覆つたおばあさん、礼儀正しく悔やみの言葉を述べるサラリーマン風の男など、あたりはがやがやとうるさかつた。そこに館内放送が降ってきた。個人の名前と、部屋番号が告げられると、どこかの親戚一同がまとまって階段に向かっていった。なんともシステムチックな火葬場だ。

火葬が終わるまで一時間ほどかかるらしい。母とおばの二人を残し、親戚たちと俺は時間をつぶすことにした。三階に食堂があるらしく、親戚の多くはそこへ向かった。もう一時を過ぎていた。俺も

いつもは腹が減っているころなのに、今は何も食べる気がしない。

俺は一階の喫煙所でタバコをふかして、窓の外を眺めたりした。空の雲が分厚く、雨が降りそうな気配だ。

三十分ほどして二階に戻つてみると、先ほどの場所におばが一人で座っていた。おばがこちらに気づいたので、俺はそばの自動販売機でお茶を二つ買った。そのひとつをおばに手渡してから、隣に座つた。

「母は？」

「姉さんなら、三階の食堂に行つたよ」

「そうですか」

俺はお茶を一口飲んだ。彼らと一緒に、母も少しほう気がまぎれるだろう。

「ねえ、康幸さん」

おばが改まって顔を向けた。

「これからは、あなたが姉さんを支えないといけないわねえ」「はい、もちろんそのつもりです」

俺は覚悟していた。いざれ俺は死ぬ。そのときまでに、母を食わせていいけるようになれ。これは親父がいつも言つていたことだ。「康幸さんも落ち込んでいるでしょうけど、姉さんのこと、よろしくね。お母さん、やっぱりまだショックを受けているみたい……」

「はい」

俺はおばの言葉にうなずいた。おばは安心したのか、ちょっと笑つてから、ペットボトルの成分表示を覗きこんだりした。遅刻したせいで俺は納棺に立ち会えなかつたのだけれど、おばは全く気にしているようだ。やはり姉妹だ。どこかが抜けている。

それから俺はおばとしばらく話をした。再びみなが集合したのは、一時をすぎたころだつた。俺の親父の名前と部屋番号が館内に流れた。俺たちは階段を下りていつた。右側の前から四番目の通路が、俺たちの呼ばれた部屋番号だ。通路は薄暗かつた。部屋に着くと、職員らしい中年の男性と若い女性がいた。中年の男性が白い扉をゆ

つくりと開けた。

俺たちは、真っ白な部屋に通された。部屋には窓の中のように熱い空気が残っていた。おそらく、この部屋全体で火葬を行っているのだろうと俺は思った。部屋の真ん中には、腰くらいの高さの台があつた。そこに親父の少し煤けた骨だけが横たわっていた。骨の回りには熱い空気がまだ固まっている。熱を持った空気からは、何のにおいもしなかつた。いつも枕に染みていた親父臭も、気が違っている時のアンモニア臭も。もう親父の体は分裂してしまって、親父ではない。これはただの骨の塊だ。親父の肉片は煤やダイオキシンをまき散らしながら、骨だけを残して、空気中へ持ち去られてしまったのだ。

親父の骨が乗る台の周りを、俺たちは取り囲んだ。ちらりと横を伺うと、母は言葉を失つて、凝然と骨を眺めていた。

女性の職員は骨壺と長い竹箸を持っていました。それらを男性へ手渡すと、男性は骨上げのやり方を丁寧に説明し始めた。

母と俺と、親戚の数人が竹箸を受け取つて、言われたとおりに骨を拾つては骨壺の中に入れていった。骨が大きすぎて入らないとき、職員の男性は箸の先で骨を小さく割つた。骨はウエハースを割るようになくさくという音を立てた。最後に頭蓋骨を入れると、骨上げも終わりとなる。

布にくるまれた骨壺を紙袋に入れて、俺と母は親戚たちに別れを告げた。親戚たちはこのまま地元まで帰らなければならないと、母が言った。けどそれは嘘で、本当は、母が精進落としなんてしたくないということらしかつた。精進落としのお金もない、付き合いのあまりない人たちの手も借りたくないと言つていたと、俺はおばから聞いていた。車の中から、おばが俺にがんばれといつよつうな目線を向けた。俺はやはりうなずいた。

俺と母は近くのバス停までゆつくりと歩いた。母は俺の声にもあまり反応せず、脱力したような歩き方をした。俺は母をいたわって、話しかけるのをやめた。

バスに揺られながら、俺は今後のことを考えていた。母は俺が就職してもなお働いているが、親父も亡くなってしまった今、親父を養うという母の目的も終わってしまった。今度は、俺が母を養つていく番じやないのか？ 給料は母より少ないけど、夏と冬にはボーナスも出るし、親父の退職金も残っているし、もう、母に苦労はかけさせたくない。とりわけ今の状態の母には。

そうだ、母と一緒に暮らそう。母はマンションを借りて暮らしているから、引越しにそれほどのお金も手間もかからないだろう。俺の職場近くで適当な物件を調べておこう。

窓から空を見上げると、垂れ込めていた雲は分厚く積みあがり、表面がうっすらと赤く色づいていた。俺は昔の小説で読んだ、火葬場の煙突を思い出した。死人を燃やし尽くした炎の起こす煙が、煙突の先から上空へと吐き出されていく。今見えている雲が、その煙突の煙で形成されているような気がしたのを、俺は頭を横に振って否定しようとした。すると雲の薄い赤色が、親父の吐いた血や、消えたはずの肉片のように見えてきた。その想念はいくら頭を振っても消えなかつた。

俺たちはバスを降りた。いつもの見慣れた景色は、厚い雲と日光のせいか、全体的に赤く染まつていた。俺は片手に遺骨の入った紙袋、もう一方の手に母のハンドバッグ、背中に自分のリュックを担いでいた。俺は正直疲れていたが、母の歩調に合わせて歩いた。と、急に雨が降ってきた。母が久しぶりに口を開いた。

「ごめん、私、傘の準備してなかつた」

俺は手荷物を置くと、急いで自分のリュックから折り畳み傘を取り出した。傘を母に手渡し、俺は手荷物を持ち直した。少しづつ雨音が強くなってきた。

「母ちゃん、俺は走つて帰るから

「だめよ、ほら」

母は傘を差すと、俺にからなりようにしてくれた。折りたたみ傘は小さすぎて、一人分には足りなかつた。母の肩が雨に濡れた。

だんだんと周りの音が聞こえなくなってきた。

「おい、濡れてつぞ」

「いいから、私のことは気にしないで。お骨をぬらしたらいけないでしょう」

正直、母には濡れてほしくなかつた。さつきの雲からの雨が、母を汚してしまったような気がした。けれど俺は母に言われるまま、体を丸めて傘の中を歩いた。

自宅にたどり着くと、時計はもう五時を差していた。俺はリビングのテーブルに荷物を置いた。リビングに敷かれたカーペットには、変色した吐血の後がまだ残つていた。

俺は遺骨を仏壇に供えた。一人で手を合わせる。俺は仏前で、親父の肉体の行方に思いを馳せた。もはや親父の肉体は、水蒸氣や二酸化炭素のように完全な氣体となつて、空へ消えてしまつたのだ。

俺は「」と返す火葬場を思い出した。火葬が行われるたび、死んだ肉体は空氣と混ざりあつて、骨だけが燃えず取り残される。俺は吸い込む空氣にほんのわずかな死臭らしきものを感じて、気分が悪くなつた。

「母ちゃん、風呂にでも入つたら？」

「そうね……」

母は体の半分までずぶ濡れだつた。

母が風呂で体を流している間、俺は荷物を片付けた。俺は胃がむかむかしながらも、着替えを済ませてから、夕食の準備に取り掛かつた。今日のような悪夢もいすれ消えてしまつだらう。俺は包丁やなべを駆使しながら、新しい生活について、より具体的にイメージした。そして今日、仕事を辞めて俺と暮らすと、母に提案する決意をした。

母が風呂から上がつたとき、食事の支度はもう終わつていた。風呂上りの顔はやつれていたが、心なしかさつぱりしていた。俺はお茶碗の水滴をふきんで拭い去ると、母に渡した。

「俺、明日まで忌引きで休みだから、明日の夕方に向こうに戻るよ。

それまで家事はするから

「うん、ありがとう、でも無理しそぎなこよひにね」

一人でテーブルに向かって座った。

「いただきます」

さて、俺もご飯をよそつては見たものの、食欲はまったくなかつた。視線を落としたまま、俺はしばらく思案した。

「あのや、これからのことなんだけど……」

と言いながら、俺は顔を上げた。母はどこかあらぬ方を見ていた。俺の声は届いていないようだ。

「そういうえば、ご飯のことをなんでシャリッと言つか知ってる?」

母は遠くを見ながら、唐突にこんなことを言つた。いきなり發せられた質問に俺は気味悪さを感じた。

「え? 知らないけど」

「シャリッて、仏様のお骨のことなんだって」

「そ…… そなんだ……」

母は食卓を正面に見据えると、箸を持ち勢いよく食べ始めた。今まで食べられなかつた分の栄養をすべて補おうとしているかのように。一方俺は、母の言葉の前に立ち去っていた。手元のご飯が遺骨とリンクし、色とりどりのおかずが死人の肉の塊に見えた。そのとき、世界は死人の塊でできている、という生々しい感触が俺の体を満たした。

「食べないの?」

「……食欲がなくつて」

「そんなこと言つててどうすんの。食べとかないと、しつかり働けないよ。それと、明日は仕事に行くから」

「え? 聞いてねえよそれ

「言つてなかつたっけ?」

俺は箸を置いたまま、食卓を前にして黙つていた。その間にま、母は次々に箸を進めていき、卓上の血と肉と骨とを、すべて胃の中押し込んでしまつた。

一緒に暮らしそうなんて、俺にはまだ言えやつにない。

(後書き)

こんには、時雨沢 翔です。

文学しようと思つたら、なんだかよくわからないお話を書いてしました。文学なんて書き慣れてないですから。

ちなみに文学というジャンルも今回初めての挑戦でした。何をどうしたらいいのかさっぱりです。

それと、なぜかあらすじが全然うまく書けないです……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7214m/>

---

葬式のあと

2010年10月8日14時09分発行